

まちのシンボルとして

大正から昭和にかけて高崎の花街史を飾った高崎電気館



◀昭和4年に新築された高崎電気館

●100年前の正月に電気館が開館

明治時代から芝居を興業していた演芸館で活動大写真が上演されて人気となり、ブームを受けて常設の映画館が高崎に初めてできたのが、今から100年前。大正2年（1913）の1月1日、花街・柳川町に電気館が開館し、まちのシンボリックな建物として、多くの人々を呼び寄せる場所となった。

無声映画の時代、電気館の舞台の右横手には弁士用のテーブルと椅子が出ており、白扇を持った弁士の姿があった。三味線や小太鼓など演奏隊が控え、映画を盛り上げた。

休憩時間には、1階の右側の木戸を開けて空気を入れ換えが行われ、開放された戸の前は娼家「越後屋」の路地に面していた。

昭和4年、木造だった電気館が火災で焼失したため、鉄筋コンクリート造のモダンな新館に建て替えられた。洋式を取り入れられ全部椅子席となり、土足のまま入場できるようにになった。照明設備も明るく、喫煙室も各階にでき、中二階の休憩室と一

花街の面影が漂う電気館界限

階東側非常口の近くに設けられた売店には、白いエプロン姿の店員がいる、近代的な映画館となった。

●花街の正月の風景

高崎の柳川町というと、戦前戦後を通して県下でも有名な花街として知られていた。日が暮れると町内が賑やかになり、花街全体が生き生きしてくる。軍服あり、若者、年配者たち、女

たちの発する客引きの声や三味線の音も流れていた。お正月の松の内の頃には、島田の鬘まげに稲の穂の簪かんざしをつけ、黒着の裾をつまんで、得意先回りをする仇あだな姿の芸者衆のあとを、箱丁はちよう（共の男衆）が付いて歩く風景も見られた。

電気館の真ん前には銭湯・柳湯があり、商い屋の多いこの地区では内風呂のある家は少なく、どの家も入浴はここを利用した。元旦の一番湯の立つ、午前6時には町内の子供たちも一番乗りをめざして集まった。

●大ヒット歌謡曲「お富さん」

昭和30年2月、電気館では「お富さん発表会」が開かれた。「お富さん」は春日八郎の大ヒット曲で、作詞をした山崎正（本名：松浦正典まつら まさのぶ）は旧制高崎中

学を経て東京美術学校に進んだ柳川町の住人。♪粋な黒塀見越しの松に仇な姿の洗い髪死んだはずだよお富さん♪の「黒塀の屋敷」は、柳川町1番地が背景となっている。また、「お富さん」は映画にもなり、電気館で上映されたときは、町内の役員をはじめ大勢の地元の人たちが見に行ったという。

●花街と映画産業の衰退とともに

柳川町が正月や祭りのときに山車が出て芸者の手古舞のついた華やかな賑わいのあったのも、戦前の頃と戦後昭和30年代前半までのこと。昭和33年の売春防止法の施行以降は、芸者置屋がなくなり、娼家をはじめ射的遊技場などもほとんど廃業し、まちは一大変革期を迎えた。

昭和41年、またしても電気館は火災にみまわれたが翌年には再建。高度経済成長の中、300軒近いバーや飲食店が乱立し賑わった柳川町の娯楽の殿堂として輝きを放った。

しかし、平成に入り映画の斜陽化が加速すると、経営の立て直しをはかるも虚しく、平成13年1月に休館となった。現在は、映画やドラマのロケ地として着目されている。